【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】　（小学校用）

都道府県名	静岡県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	韮　山　町　立　韮　山　小　学　校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	3	3	3	1	１９	
児童数	１０６	９９	１１３	１１８	１０９	１１１	1	６５７	２６

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

「生き生きと学び合う子」の姿をめざして

～「高め合い」、「伝え合う」場としての「なるほどタイム」～

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

①全学年全学級で実施（少人数指導～全学年算数）

児童の理解や習熟の状況に差が出やすい教科であるため。また、個に応じた指導が必要とされるため、算数科において少人数指導を実施することとした。

少人数指導重点学年は、２年・３年・４年とした。基礎の定着、具体的な思考から抽象的な思考への過渡期であることを意識した。また、少人数担当が２名配置の学年は、３年と５年とした。特に、５年生は、学習内容が多い事への対応を考慮した。

なお、１年～５年については少人数担当が学年部に配置され、全クラス共通の少人数担当が指導に当たった。また、学年の算数指導の中心的役割を果たし、学年間の情報を共有化し、指導の改善に生かしている。また、クラスを開く役割を果たしている。

②すべての教育活動の中で学力向上を図る

本校の取り組みの３つ柱は、学校の教育活動全体に関わるものである。多面的な取り組みの中で、「確かな学力」の向上を目指している。

（２）年次ごとの計画

平成15年度	**研究テーマ** 「生き生きと学び合う子」の姿をめざして ～「高め合い」、「伝え合う」場としての「なるほどタイム」～ **研究の内容・方法** 授業改善・学びを支える基礎基本・学力向上の条件整備の３つの柱で、学力向上フロンティアの重点３項目の具現化に取り組んだ。 学び合う姿の中にこそ、確かな学力の向上があると仮定し、「なるほどタイム」の取り組みを通して授業改善に取り組んだ。

「なるほどタイム」とは？

・集団の中で、多様な考えや思いを伝え合う時間
・自己の学びがゆさぶられ、より高い学びを得る時間

研究仮説

学習過程における『なるほどタイム』を意図的に設定し、子ども達が、新たな考えや思いを伝え合うことで、生き生きと学びを高めることができるだろう。

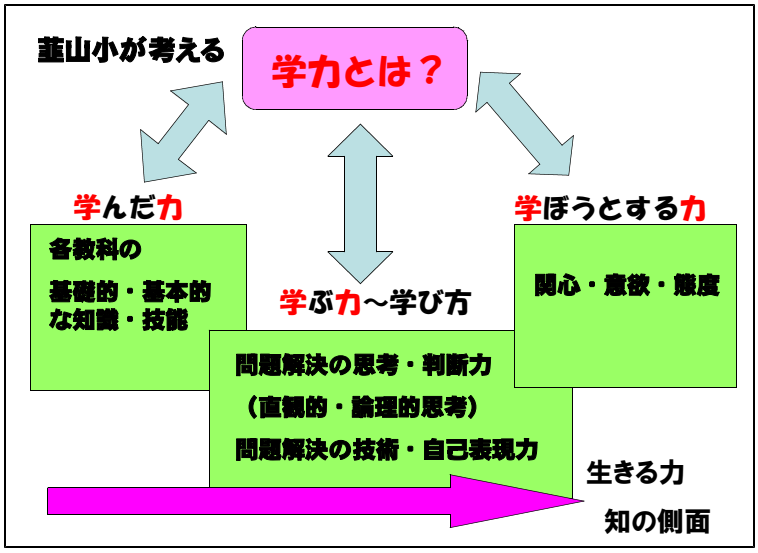
平成16年度

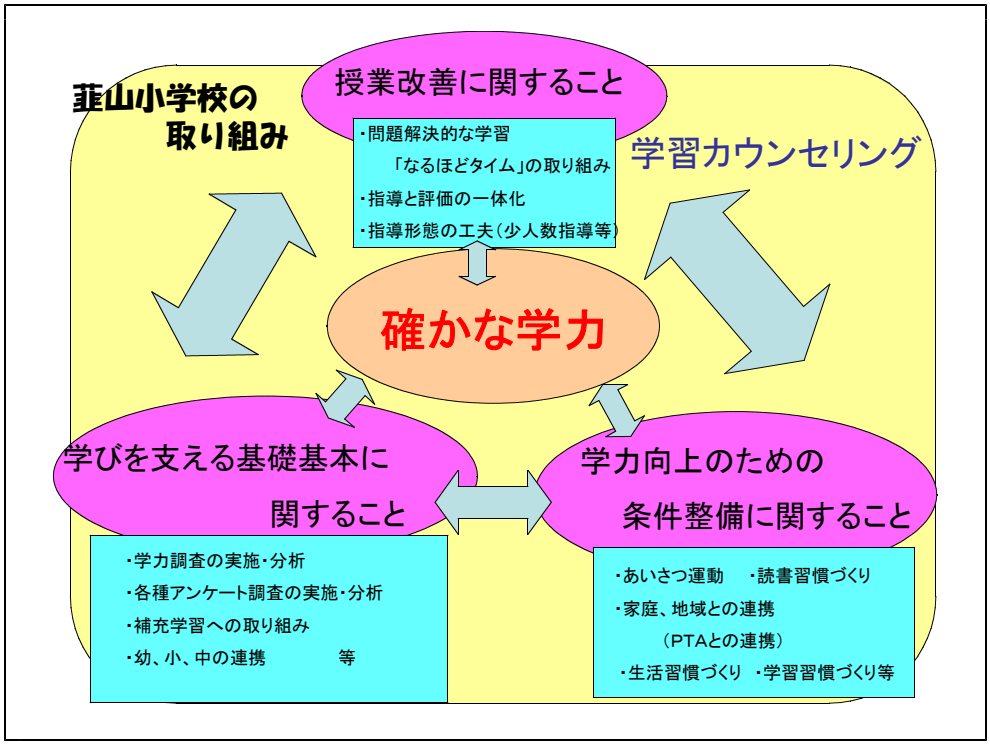
研究テーマ

生き生きと学び合う子の姿をめざして
～確かな学力を求めて
３つの柱からのアプローチ～

研究の内容・方法

韮山小学校では、右図のように学力を押さえた。学習指導要領がねらいとする「生きる力」の「知の側面」を学力と押さえ、その向上を図っていく。一般的には学んだ力を学力ととらえる傾向があるが、本校では、学ぶ力・学び方、そして、学ぼうとする力（関心・意欲・態度）まで含めて学力と考えた。





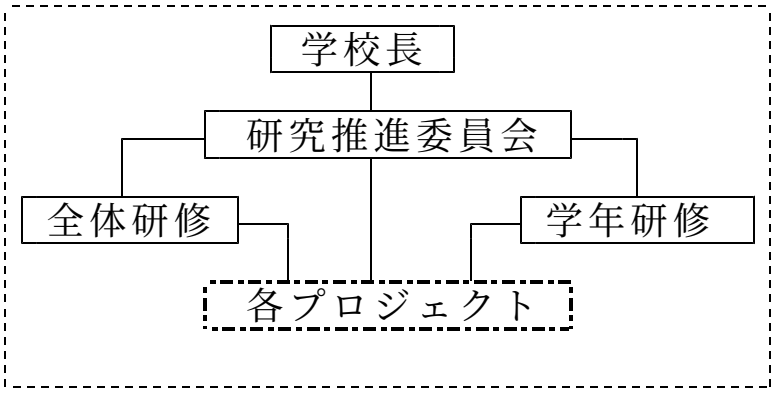
こうした学力の向上を図るために、左図に示した３つの柱で、学力向上をめざしていく。また、個に応じた課題に対応するために、常に土台となる「学習カウンセリング]を機能させていくこととする。

あくまでも、取り組みの中心は授業改善とし、学び合いの中で、確かな学力を求めていく。

１６年度は、それに加え補充学習の充実、読書習慣作り、家庭との連携等に重点的に取り組んでいくこととする。

（１６年度教育課程は、研究構想図の具現化を意識したうえで編成した。）

（３）研究推進体制



各種プロジェクト部会の設定
（期間を区切って活動。情報の共有化を図った。）

・アンケート部
・ワークシート作成部
・学力調査部　・授業改善部
・学習環境部　・ホームページ部
・教育課程研究部　・資料整理部 等

・研修推進委員会を中心に、基本的な研修計画を立案。授業研究については学年部を基本とした体制で取り組んだ。授業研究及び全体での共通理解に関わる点については、全体研修の中で行ってきた。
・全体研修とは別に、学力向上フロンティアスクールに関する事項について、各種のプロジェクトを立ち上げ、調査、検討を経て、全体研修の中で共通理解を図ってきた。授業研究と並行した形で作業を進めた。学力向上フロンティアスクールの取り組みについての課題、問題点を全職員で共有化することができた。

Ⅲ　平成１５年度の研究成果及び今後の課題

１．研究の成果

・少人数指導については、形態の研究から授業の質的な研究に移行することができた。（学び合いの視点で、少人数指導についても研究協議が出来るようになった。）
・少人数担当を中心とした授業作りが、効果的に機能した。算数への意欲的な取り組みが見られるようになってきた。習熟度別コース学習など、自分に適したコースで学習することが楽しいと感じる子どもが増えた。
・指導形態については、単元や子どもの実態に応じて、多様な形態を取り入れた。どの指導形態であっても、「学び合う姿」である「なるほどタイム」を意識できるようになった。
・学習カウンセリングを機能させることによって、習熟度別コース学習において、適切なコース選択が出来るようになってきた。（アンケート結果からも明らかになった。）
・本校の発展については、もし○○だったら、例えば○○ならば、というように視点を変えたり、広げたりすることで、習熟度別のみならず、様々な場面で子どもの思考を広げることができた。プリント学習、難問にチャレンジという画一的な考えから脱却し、子どもの思考の広がり・深まりを意識した発展的な学習が実践されるうようになってきた。
・児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善については、学びの振り返り場面を設定してきた。この自己評価カードの記入により、子どもの学びを評価するとともに、指導の反省材料としてきた。また、個々の課題を明確にすることにより学習カウンセリングにも役立ててきた。

２．今後の課題

・発展的な学習については、今後も教材開発をするとともに実践記録の積み重ねをしていく。
・補充学習については、平成１６年度は週日課（週２回５校時終了後）に時間を確保した。算数の年間指導計画とリンクした補充計画を進めていく。
・指導体制的には、本年度のように、少人数担当を学年に配置することで指導の協同体制が確立できると考える。今後は、どんな指導形態であっても、授業改善をめざしていく取り組みが課題である。

・本校の授業改善のキーワードである学び合いの姿「なるほどタイム」は、ひとり学びの充実が前提となっている。授業過程の「ひとり学び」の段階で、評価及び支援が全ての子どもに対して保証できるような手立ての工夫が今後の課題である。
・学力向上をどのように評価していくのか？これが、もっとも難しい課題である。本校が目指す学力の向上を、何をもって測るのか？学力調査、評価カード等の工夫改善である。特に、自己評価カードの項　目をどのように設定するのが効果的なのか、今後研究を進めていきたい。
・少人数指導にすればするほど、ひとりひとりの教員の指導力が問われることになる。全職員が、授業改善を通して、指導力向上（力量形成）を図っていくことが、必要である。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取り組み

・アンケート調査プロジェクト部を作り、各種アンケートを実施し、本校の児童の実態把握（学習・生活等）を行った。同時に、保護者・本校教員にも調査を実施し、今後の方向性を決める資料とした。
・１６年度は、項目を焦点化し、比較資料として活用していく。
・総合学力調査の実施～１２月実施（教科～算数は全学級、意識調査は各学年抽出１学級）次年度は、１０月ごろ実施し、比較検討の資料としたい。（実施教科については未定）

Ⅴ　フロンテイアスクールとしての研究成果及び普及

・中間報告会（１年次）

（１）平成１６年２月１３日（金）　　午後１３：００～１６：３０
（２）内容　中間報告（１年次の成果と課題について）
　　公開授業（１年・３年・５年　　３年については、習熟度別少人数指導）
　　講演会　　算数科に関わる学力について　　岡本　光司　先生

　参加者（教員・一般含め約１００名）

・研究発表会（２年次）

（１）平成１６年１１月１１日（木）　　午後１３：００～１６：３０
（２）内容　全体報告（２年間の成果と課題について）
　　公開授業
　　詳細は未定

・ホームページによる、研究成果の報告

ホームページアドレス　　http://www.wbs.ne.jp/cmt/nirayama/

韮山小学校メールアドレス　　nirayamasyou@poem.ocn.ne.jp